九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

新公開の劉承幹と周作人の日記に見える濱一衛 : 兼ねて濱文庫所蔵『春水』手稿本を論ず

中里見, 敬
九州大学大学院言語文化研究院: 教授

https://doi.org/10.15017/1812926

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2016/2017, pp.1-11, 2017-08. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

論文

新公開の劉承幹と周作人の日記に見える濱一衛
－兼ねて濱文庫所蔵『春水』手稿本を論ず－

中里見　敬 †

<抄録>

2016 年に中国で出版・公開された劉承幹『求恕齋日記』および「1939 年周作人日記」の中に，濱一衛に関する記述が見つかった．九州大学附属図書館濱文庫に所蔵される中国演劇資料を収集した濱一衛の中国留学・再訪に関するこれらの新資料を紹介し，あわせて「1939 年周作人日記」によって由来が明らかになった濱文庫所蔵『春水』手稿本について論じる．

<キーワード>　濱文庫，浜文庫，濱一衛，浜一衛，劉承幹，嘉業堂，『求恕齋日記』，周作人，『周作人日記』，銭玄同，兪平伯，谷音社，冰心，謝冰心，『春水』

Hama Kazue in Liu Chenggan and Zhou Zuoren's Diaries: Referring to the Manuscript of Bingxin's *Chunshui (Spring Water)*

NAKAZATOMI Satoshi

1. はじめに

筆者は濱文庫所蔵の中国演劇資料の整理・研究を行う一環として，濱一衛の中国留学期の観劇活動，および資料収集の経緯についても調査を進めてきた [1].

このたび中国で新たに公開された資料 2 点の中に，濱一衛に関する記述が見つかった．1 つは劉承幹『求恕齋日記』である．1936 年 4〜5 月にかけて濱が上海・蘇州等を調査旅行した際に，湖州南潯鎮にある劉承幹の蔵書楼・嘉業堂を訪れ，当地で蘇州・文全福一座の南方崑曲を観劇した [2].『求恕齋日記』の記録は，濱の嘉業堂訪問を劉承幹側から証言するものである．

もう 1 つは『周作人日記』のうちこれまで未公開であった 1939 年の部分である．濱一衛は 1934 年 6 月から 1936 年 6 月まで 2 年間の北平留学中, 最初の約半年を除く 1 年半の期間, 八道湾の周作人邸に寄宿した [3]. 帰国後の 1939 年夏, 松山高等商業学校教授となっていた濱は北京を再訪する [4]．今回この時期の『周作人日記』が新たに公開されたことで，濱の北京再訪を周作人側から確認することが可能になった．

2. 劉承幹『求恕齋日記』

劉承幹『求恕齋日記』は稿本 51 冊が上海図書館に所蔵されており，2016 年に北京の国家図書館出版社より稿本全巻が影印本として刊行された．この日記は 1910 年から 1960 年までの 50 年間にわたる大部なものである．あわせて陳誼の整理による『嘉業堂蔵書日記抄』上・下（南京：鳳凰出版社, 2016）も刊行され，蔵書の売買や出版・編集事業等，嘉業堂の管理運営について比較的簡便に知ることが可能となった（ただし『日記抄』は 1936 年の部分まで）．[5]

『求恕齋日記』（ならびに『嘉業堂蔵書日記抄』）1936 年閏 3 月 13 日（旧暦，新暦では 5 月 3 日）の部分に，濱一衛の名前を見出すことができる．『求恕齋日記』から引用すると，以下のとおりである（原文の下線は筆者による．日本語訳は拙訳．以下同じ）．

> （閏三月）十三日［五月三號］．陰．午後，日人濱一衛【京都文化會】持授經丈介紹函來，欲至南潯書樓參觀．由剛甫代見，作書致韻秋，交其帶往，伊明後日即須動身也．（第 11 冊 422-423 頁，日記抄 665 頁）
>
> 〔閏 3 月 13 日（5 月 3 日）．曇り．午後，日本人濱一衛（京都文化会）が董康の紹介状を持って来て，南潯の蔵書楼に行き参観したいとのこと．代理で沈家権に面会させ, 韻秋宛の手紙を書かせる．それを（濱に）渡して携行させる．彼は一両日中に出発しなければならないとのこと.〕

短い記述であるが，本文中に下線を付した 3 人について注釈を付しておこう. まず授経とは董康（1867-1947）の字（あざな）. 董康は司法総長, 財政総長等を歴任した著名な法学者・政治家であり，蔵書家としても日本での訪書記録を綴った『書舶庸譚』が知られている．『嘉業堂蔵

† なかざとみ さとし　　九州大学言語文化研究院教授，附属図書館研究開発室室員　　E-mail: naka@flc.kyushu-u.ac.jp

書志』の編纂にも携わり，劉承幹とは深い交流があった．次に，韻秋とは嘉業堂の編目部主任（楼主任）を務めていた施維藩（1897～1944，字・天遊，号・韻秋）のこと．以上の2名については注2の前稿でも触れた．

今回新たにこの日記に名前の見える剛甫とは，劉承幹の秘書を長年努めた沈家権である．剛甫は字で、亢父という号も有していた．文人の軼事を多く記した鄭逸梅「芸林散葉」の第 1075 条に以下の記述がある．

> 南浔刘翰怡书札，大都出于沈亢父手．沈名家权，一字刚甫，吴兴人，能诗，任刘记室三十余年．
> 〔南潯の劉承幹（号・翰怡）の書簡は，ほとんどが沈亢父の手になる．沈の名は家権，字は剛甫，呉興の人．詩をよくし，劉の秘書を 30 年余り務めた．〕[6]

濱文庫には南潯の嘉業堂までの道順を毛筆で記した一枚の紙片が所蔵されている（図 1）．

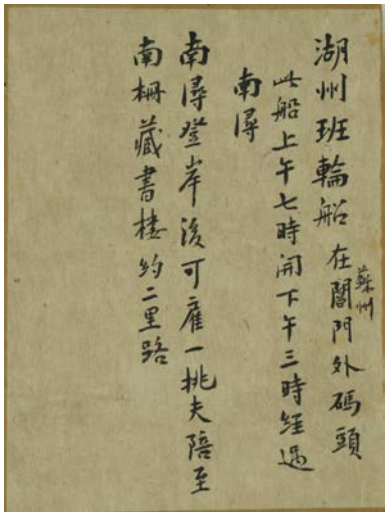
湖州班輪船 在蘇州閶門外碼頭
此船上午七時開下午三時經過南潯
南潯登岸後可雇一挑夫陪至
南柵藏書樓約二里路

図 1　蘇州から南潯嘉業堂までの道順メモ，沈家権筆（浜文庫／集 181／15）

> 湖州班輪船，在蘇州閶門外碼頭．
> 　此船上午七時開，下午三時經過南潯．
> 南潯登岸後，可雇一挑夫，陪至南柵藏書樓，約二里路．
> 〔湖州行きの汽船は，蘇州の閶門外の埠頭（で乗る）．その船は午前 7 時に出港し，午後 3 時に南潯を通過する．南潯で下船の後，荷担ぎ人夫を雇い，南柵の蔵書楼までいっしょに行ってもらうのがよい．約 2 華里（1 キロ）の道のり．〕

『求恕齋日記』の記述により，この紙片が劉承幹ではなく，沈家権の筆になるものであることが明らかになった．『求恕齋日記』には連日のように，「囑剛甫作書致某某」（剛甫に頼んで某某宛の手紙を書いてもらう）という記述が見られる．1930 年頃までの『求恕齋日記』を見ると，剛甫ではなく，醉愚に手紙を書かせている．醉愚は沈焜（?-1937）の字，浙江石門の人．劉承幹は徐々に沈焜から沈家権へと秘書の仕事を引き継がせ、1936 年の濱訪問時はもっぱら沈家権が劉承幹の主任秘書の役を果たしていたわけである．

この日記から判明したもう一つの事実は，濱一衛は直接には劉承幹に面会しておらず，沈家権が対応にあたったことである．弱冠 26 歳の濱に，54 歳だった劉承幹は面会せずに，代理人に対応させた．濱は董康の紹介状を持っていたので，嘉業堂の参観を許されたが，面識のない日本人は門前払いを受けることもあった．例えば，『求恕齋日記』の 1931 年 4 月 28 日（旧暦，新暦では 6 月 13日）には次のようにある．

> 有日本人名山田謙吉者（上海東亞同文書院）來會．予未見，留片而去．予與此人素不相識，未知此人是否來會．予應詢問明白．（第 10 冊 59 頁，日記抄 617 頁）
> 〔山田謙吉という日本人（上海東亜同文書院）が面会に来た．私は会わず，名刺を置いて帰る．私はこの人とは面識がなく，来訪を知らされてもおらず，事情をはっきりと問いただすべきだった．〕

一方で，学識を認めた日本人とは交流している．例えば，今関寿麿（天彭）が北京滞在中の劉承幹を訪れた 1922 年 10 月 23 日（旧暦，新暦では 12 月 11 日）の日記は以下のとおりである．

> 日本人今關壽麿偕賀賜湖（名嗣章，湖南人，在三井洋行，善日語）來訪，長談而去．今關壽麿嗜我中學，研究特甚，曾著《宋元明清儒學年表》，蓋吾華古人中之有學問者，靡不研究，一一表而出之．昔在滬上曾來余家觀書，惜余未見，乃於今日見之．（第 7 冊 159 頁，日記抄 449 頁）
> 〔日本人の今関寿麿（天彭，1882-1970）が賀賜湖（名は嗣章，湖南の人，三井洋行〔補注：三井物産の中国での呼称〕に勤務し，日本語ができる）とともに来訪し，しばらく話して帰る．今関寿麿は我が国の漢学を好んで研究している．『宋元明清儒学年表』を著し，我が国の古人で学問のある者を，すべて調べて一々年表に記している．以前，上海で我が家に本を閲覧に来たときには，残念ながら会えなかったが，今日ようやく面会できた．〕

その後 11 月 5 日（旧暦，新暦では 12 月 22 日）には劉承幹の方から今関を訪ねている．

余出至裱褙胡同訪日本人今關壽麿，贈以舊刻十六種，以言語不通，筆談良久，知其中學根柢甚深，吾國知名之士相識不少，亦不愧為通儒也.（第 7 冊 171-172 頁，日記抄 453 頁）

〔裱褙胡同に出かけて, 日本人の今関寿麿を訪ね, 旧刻十六種を贈った．ことばが通じないので，しばらく筆談して，漢学の基礎がしっかりしていることがわかった．我が国の著名な人士に知り合いが多いのは，さすがに博識の学者ならではのこと.〕

言うまでもなく，一流の文化人である劉承幹には連日多くの訪問客があり，その対応が日記には克明に記されている．したがって，面識のない日本人に会わなかったことは異とするに足りない．濱が嘉業堂で厚遇を受けたのは, 董康の紹介のおかげであったに違いない.

また，日記には劉承幹の率直な日本観が綴られている．例えば，1923 年 7 月 23 日（旧暦，新暦 9 月 3 日）には関東大震災の知らせを受けて，次のように記す.

午后閲報知日本東京、横濱二處大地震，後繼之以大火，東京則市面去十之七八，横濱則全地毀滅，幾無存者，實為中外古今未有之奇災，其損失不知幾千萬萬．近數十年來，我國為日本所欺，亦不可勝計，至今日國勢如此衰微，皆受日本之影響所致，今彼遇此大災，實天之報施，恐日本從此不振矣.（第 7 冊 301-302 頁，日記抄 479 頁）

〔午後，新聞で日本の東京・横浜での大地震を知る．続く大火によって，東京は市域の七、八割を失い，横浜は全域が壊滅し，生存者はほとんどいないとのこと．実に古今内外未曾有の大災害で，その損失は幾千億とも知れない．ここ数十年来，我が国は日本にあなどられること，数えきれない．今日国勢がこれほど衰えたのは，日本の影響によるものである．いま日本がこのような大災害に遭ったのは，まことに天の報いであって，おそらく日本は今後振るわなくなるだろう.〕

あるいは満洲事変（柳条湖事件）の勃発した 1931 年 8 月 12 日（旧暦，新暦 9 月 23 日）には，次のように記して，自国政府を批判している.

今日為日本侵佔東三省，全國下半旗誌哀，強鄰侵略，皆内政不修之故，對内則言討伐，対外則主退讓，亦可慨矣.（第 10 冊 118 頁，日記抄 624 頁）

〔今日，日本によって東三省が占領された．全国で半旗を掲げ哀惜の意を表す．強大な隣国が侵略するのは, 内政がきちんとしていないからである．内には討伐するといい，外には譲歩を続ける．嘆かわしいことである.〕

激動の 20 世紀を約 50 年にわたって 1 日も欠かさず記録した『求恕齋日記』は一級の史料であり，とくに 1937 年 8 月の第二次上海事変と，それに続く日本軍による南潯侵攻と嘉業堂の略奪は，我々も無関心ではおれない．なお,『嘉業堂蔵書日記抄』は 1936 年 5 月 22 日（旧暦，新暦 7 月 10 日）までで終わっており，これ以後の部分については，手稿本である『求恕齋日記』の影印によるほかなく，今後の研究に待ちたい．[7]

3.「1939 年周作人日記」

「1939 年周作人日記」は，北京の中国現代文学館が発行する『中国現代文学研究叢刊』2016 年第 11 期に掲載された．中国知網（CNKI）でも公開されている.

以下,「1939 年周作人日記」から濱一衛の名前が記された部分を引用し，簡単なコメントを付す.

3.1. 1939 年 1～6 月（書信往来と松山高商からの来客）

一月九日 晴
发信：纪生
收信：炎秋、子秀、藤江、太坚（片）、平白、濱一衛
一月十日 晴
发信：濱君、纪生、《实报》
收信：傅芸子、藤本、柳田（片）、 苦水、凤举（平快）、耀辰、炎华、纪生

1 月 9 日に濱一衛から手紙を受け取った周作人は，翌日には返信している．9 日には 6 通，10 日には 8 通の手紙または葉書を受け取っており，すべてに返信しているわけではない．なお,（片）は葉書を意味する.

三月二十日 晴，阴
饭后松山高商、杉野、横田、村尾来访丰一，交濱君贈物．与谈良久.

〔食後に松山高商の杉野，横田，村尾が豊一を来訪し，濱君からの贈り物を渡す．ともにしばらく歓談す.〕

この日, 夕食後に松山高等商業学校から杉野, 横田, 村尾の 3 名が周作人の長男である周豊一を訪ねてきて, 濱一衛からのおみやげを渡している．父親である周作人も加わって，日本から息子を訪ねてきた来客と長時間話し込んでいるさまからは，周家の雰囲気がうかがえて微笑ましい．赴任校での濱一衛の教師ぶりが話題になったのかもしれない．杉野，横田，村尾の 3 名に

ついては不詳だが，松山高商の学生か同僚であろう．

六月二十八日 晴
发信：松筠阁（片）
收信：金城银行、王俊瑜、濱一衛
六月二十九日 晴，阴
发信：宝铭堂（片）、亢德、濱一衛

ここでも周作人は濱一衛からの来信に対して，翌日には返信している．

3.2. 1939 年 8 月（濱一衛の来訪）

八月二日 晴
夜濱一衛君自日本来，留住．
〔夜，濱一衛君が日本から来る．泊まってもらう〕
八月八日 晴
濱君得电报云十四日征集．
〔濱君に電報が来て，14 日に召集とのこと〕
八月九日 晴，下午小雨，热，93°
晚濱君索旧照片及友人书，以平伯诗二、玄同札一赠之，又予以所书《掷钵诗》一纸．
〔夜，濱君が昔の写真と友人の書を求めるので，兪平伯の詩 2 篇と，錢玄同の書簡 1 篇を贈る．さらに自筆の「擲鉢詩」1 紙も贈る〕
八月十日 晴，热，92°
上午六时濱君出发归国．
〔午前 6 時に濱君が出発，帰国する〕
八月十一日 晴
得青岛濱君之兄电，晚发回电，二十五字二元一角五分也．
〔青島の濱君の兄から電報あり，夜に返信の電報を打つ，25 字で 2 元 1 角 5 分〕

8 月 2 日から 11 日までの日記には，濱一衛の来訪と帰国の顛末が記されている．留学から 3 年後のせっかくの北京再訪であったが，8 月 14 日入隊の臨時召集令状が来たとの電報が 8 月 8 日に周作人宅に届き，濱は 8 月 10 日に慌ただしく帰国している．帰国前日には，濱が所望して，著名な文人学者の詩書と、周作人自身の詩を贈られている．この帰国が，濱一衛にとって周作人との終生の別れとなる予感でもあったのだろうか．

なお，8 月 8 日に北京の周作人宅に届いた電報 2 通は現在，濱文庫に保存されている．1 通は周作人方濱一衛宛で，電文は以下のとおり．（図 2）

八ガツ一四ニチ　ニユタイノ　リンヂ　シヨシユレイ　キタ　スグカヘレ　フミ

もう 1 通は周作人宛で，以下がその電文である．

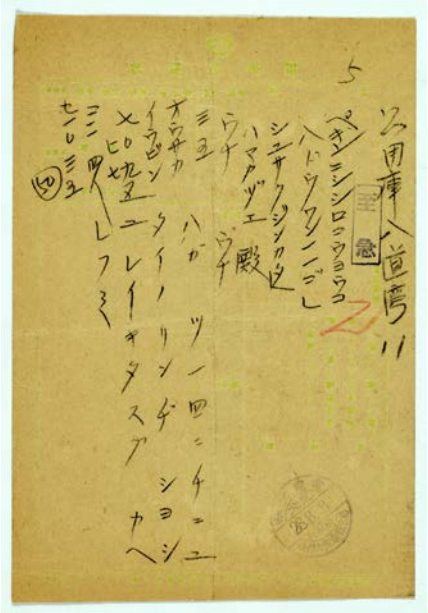

図 2　1939 年 8 月 8 日付け，(濱)フミ夫人より周作人方濱一衛宛電報（浜文庫／未整理）

ハマカヅエ　オルカ　オラナイカ　ヘンタノム　オオサカキタハマ五ノ四一　ヤマナ

周作人に贈られた「擲鉢詩」とは「苦茶庵打油詩」其三を指す．前年の 1938 年 12 月 16 日に作られ，1939 年 6 月 16 日に『宇宙風』に掲載されたものである．[8]

粥飯鐘魚非本色，劈柴挑担亦隨緣．
有時擲鉢飛空去，東郭門頭看月圓．
廿七年十二月十六日作．
〔粥飯鐘魚は本色に非ず，柴を劈り担を挑ぐも亦た縁に随う．有時に鉢を擲げて空に飛び去らしめ，東郭門頭に月の圓かなるを看ん．〕

1937 年 7 月 7 日の盧溝橋事件以降，日本軍に占領された北平から多くの知識人が脱出した．1938 年 5 月には茅盾・老舎・郁達夫ら 18 名の連名で「致周作人的一封公開信」が発表されるなど，北平に留まる周作人に対する批判は高まっていた．周作人は苦渋の心境を「打油詩」に託したとされる．ここでは劉岸偉氏の解釈を引いておこう．

ご飯を炊き，鐘を撞き木魚を敲くといった出家人の日常は，そもそも自分の性に合うものではないが，必要となれば，薪を切り，重荷を担ぐのもすべて機縁に委せたほうがよい．ただ時には，飯食いの鉢を虚空に抛り投げて，あの紹興城の東郭門に出て満月でも見ようじゃないか．[9]

「苦茶庵打油詩」其六の後に付した案語に，周作人は次のように記している．

> 案，廿八年元日遇刺客，或云擲鉢詩幾成讖語，古來這種偶然的事蓋多有之，無怪筆記上不乏材料也．
> 〔案ずるに，民国 28 年元日に刺客に襲われたことは，擲鉢詩が讖語となって予言していたようだという人がいる．昔からこうした偶然はしばしばあることだ．どうりで筆記小説の材料に事欠かないわけだ．〕[10]

1939 年元日に周作人が自宅で何者かに銃撃されるという暗殺未遂事件がおこった．この案語は「擲鉢詩」が不吉な予兆であったという説を一笑に付している．ともあれ，幸いにも命拾いをした周作人は，この因縁の詩を濱一衛へ記念として贈ったのである．[11]

8 月 9 日には「擲鉢詩」と同時に，銭玄同と兪平伯の詩書も贈られている．2 人とも周作人ときわめて近い学者・作家であった．新文化運動の中心人物である銭玄同（1887-1939）と周作人は，日本留学時代の 1908 年，ともに章太炎の講筵に侍って以来の友人であった．銭玄同も日本占領下の北京に残り，周作人と往来を続けていたが，1939 年 1 月 17 日に急逝したばかりであった．兪平伯（1900-1990）は北京大学での周作人の学生であり，詩人・散文作家，また紅楼夢研究家として名高い．兪平伯もまた日本占領下の北京に留まった．このように周作人が自身の「擲鉢詩」に加えて，終生の友人と弟子の書を濱一衛に贈ったことから，周の濱に対する厚い信頼がうかがわれる．

ところでこれより 3 年前，濱一衛が留学中の 1936 年 5 月 29 日，兪平伯の周作人宛書簡に濱の名前が見える．1935 年に兪平伯が清華園で結成した崑曲愛好者の集まりである谷音社の第 5 回会合に、濱一衛を誘う内容で，周作人に濱への伝言を依頼している．書簡中に名前の見える浦江清（1904-1957）も谷音社のメンバーで，当時清華大学の教員であった．

> 知堂师：
> （中略）讲义已问浦，据云只选授元明戏曲（此讲义恐无用），其他均口说并无讲义，兹将实情奉复，乞转告滨一衛君．又渠前次浼平唱曲，以是日无“笛”遂未能如命．下月七日星期日下午一时至六时半，在清华大学同方部曲集，计有十二折并分赠曲词，滨君其时如尚未行，盼其赐临，可于十二时乘公车来，其归则五时、七时俱有车开，并盼转致鄙意．近日亦忙得不了．匆叩
> 道安
> 弟子平顿首　五、廿九
> 〔周作人先生
> （中略）講義ノートの件，浦江清に尋ねたところ，元明戯曲の一部を選んで講義しただけで（その講義ノートは恐らく役に立たなかったようです），その他はすべて口述のみで講義ノートはないとのこと．以上，実情をご報告申し上げ，濱一衛君にお伝え願います．また前回，彼が私に崑曲を唱うよう求めましたが，その日は「笛」がなかったので希望に添えませんでした．来月 7 日日曜日午後 1 時より 6 時半まで，清華大学の同方部で谷音社の崑曲の集まりを催します．全部で 12 折あり，曲詞を配付します．濱君がそのときまだ帰国していなければ，ぜひ御来臨いただきたく思います．12 時のバスで来て，帰りは 5 時と 7 時にバスがあります．愚意をお伝えいただきますようお願い申し上げます．最近はまた忙しくしております．先生のご健勝をお祈りいたします．
> 弟子兪平伯頓首　5 月 29 日〕[12]

この書簡から，周作人が濱一衛のために兪平伯を紹介し，兪平伯もまた清華大学の谷音社への参加を誘っていることがわかる．若輩の留学生に対して異例の厚遇といってよいだろう．一方，濱も崑曲の講義ノートや曲詞を積極的に求め，滅亡の危機に瀕していた崑曲の実演を聴くことを切望していたのであり，同好の士である兪平伯がその熱意に応えようとしたことがわかる．なお，濱一衛は 1936 年 6 月 10 日に塘沽港から帰国している．帰国直前の 6 月 7 日に開かれた第 5 回谷音社の会合に参加できたかどうかは不明である．少なくとも，谷音社に参加したことを濱自身が記した文章は残っていない．

3.3. 1939 年 9～11 月（『春水』手稿を濱一衛に贈る）

九月二十八日 晴
收信：濱君（片）

濱の突然の帰国後、最初の来信は 9 月 28 日着の葉書であった．周作人日記にはその内容まで記されていないが，後年周作人の長男・周豊一が回顧録で触れたものと同一であったかもしれない．

> 浜兄の三度目の来京は戦争中，しかも終りかかった時分にひょっこり八道湾へ姿を現わし，全く思いがけなく一家挙げての大歓迎だった．が数日後，またも思いがけないことが起ったのだ．それは情ない召集令が北京にまで追っ掛けてきたことだ．折角北京で楽しく日日を送ろうとした浜兄は已を得ず早速帰国せねばならなかった．
> それっきり逢うことができなかった．後程思わ

ず浜兄からひらっと舞い込んだ手紙に自分は台湾方面へ派遣されただけで，今は帰省しているから心配なくと知らせて来た．よく考えると浜兄のような近眼で体質も絶対に合格的ではなかった学者などに軍服を着せなければならなかったことを可笑しいと思った．[13]

濱一衛から便りのあった約 1 週間後，書斎で古新聞などを整理していた周作人は思わぬものを掘りあてる．

十月五日 晴
下午又整理旧报．得《春水》原稿，拟订以赠濱君．卖故纸千四百三十斤，得七十一元，留廿元备裱糊外院西屋之用，以其余分给家中用人．
〔午後，また古新聞を整理する．『春水』の原稿が出てきたので，装丁して濱君に贈ることにする．古紙 1430 斤を売って，71 元を得た．外院西屋の壁紙を貼り替えるのに 20 元をとっておき，残りは家の使用人に分けてやる．〕

『春水』とは冰心（1900-1999，日本では謝冰心とも）の詩集で，1922 年 3 月 21 日から同年 6 月 30 日にかけて『晨報副鐫』に掲載の後，1923 年 5 月に新潮社文芸叢書の第 1 冊として刊行された．当時，周作人は文芸叢書の主編を務めていたため，原稿がそのまま手元に残ったのであろう．周作人はこの日記の記載どおり，実際に冰心の『春水』原稿を濱一衛に贈っており，現在，九州大学附属図書館の濱文庫に所蔵されている．『濱文庫（中国戯劇関係資料）目録』11 頁に見える以下の記述がそれである．

春水一巻（詩集） 冰心女士撰 民國二十八年 北平寫本 一帙一冊 浜文庫 集一五 1 1186008388[14]

中国新文学の経典的地位を占める著名な女性作家である冰心は解放後，中国作家協会の名誉主席・顧問等の要職を数多く歴任し，晩年は「文壇の祖母」と称され，人々に敬慕された．現在に至るまで中国では語文の教科書に作品が採用されており，根強い人気がある．冰心『春水』の自筆原稿は、中国現代文学における第一級の貴重な資料であり，次節でさらに考察を加える．

十月八日 阴，冷
发信： 濱（件） 、《华光》（稿）
十一月十日 晴，冷，见冰
收信：濱一衛
十一月二十四日 晴，风
下午遣人取濱君寄小包来，乃是照片也．
〔午後，人をやって濱君からの小包を受け取りに行かせる．写真であった．〕
十一月二十九日 晴，风
发信：沪抱经堂（航信）、濱一衛、耀辰

10 月 8 日に発送した濱宛の信件が，おそらく『春水』の原稿だったのであろう．11 月 10 日には濱一衛からお礼状が届き，続く 11 月 24 日には濱から写真の入った小包を受け取る．それに対して，11 月 29 日には周作人から濱宛に礼状を出している．

1939 年の『周作人日記』に記された濱一衛に関する記述は以上ですべてである．なお，日記の末尾に住所録があり，濱一衛の名前と松山の住所が記されている．

住所人名录
爱媛縣道後湯之町祝谷四三二
濱一衛

1939 年 8 月北京再訪の目的について，濱一衛自身が記した文章は残っていないが，次のような可能性が考えられる．濱文庫には周作人著，濱一衛訳『苦茶菴笑話選』の原稿が保存されている（浜文庫／日文風刺／3, 4）．さらに，1940 年 4 月 23 日に周作人が松枝茂夫に宛てた書簡には，

今日收到『中國文學』六十號，得讀大文，且感且愧．又見創元社廣告，知《瓜豆集》等選譯本將出板，即《笑話選》亦由濱君擔任翻譯，更增惶恐矣．
〔本日『中国文学』60 号を受け取り，大作を拝読，感激すると同時に慚愧に堪えません．さらに創元社の広告を見て，『瓜豆集』などの選訳本が出版予定とのこと，『笑話集』も濱君によって翻訳されることを知り，ますます恐縮の至りです．〕[15]

と記されている．このことから推測すると，創元社から出版予定だった周作人著『苦茶菴笑話選』の翻訳上の問題について，濱は直接周作人に教示を請う目的で訪問したのではないかと思われる．なお，濱一衛訳『苦茶菴笑話選』の出版はついに実現することがなかった．その理由は不明である．「訳者の言葉」と周作人の序文からなる「『苦茶菴笑話選』訳原稿」（浜文庫／日文風刺／4）は，創元社の原稿用紙に書かれており，出版に向けた準備が相当進んでいたことがうかがわれるだけに，残念である．

もう一つの可能性は，1939 年元旦の暗殺未遂事件のお見舞いに訪問したのかもしれない．この事件は，日本でも『都新聞』や『大阪朝日新聞』で報じられたため，濱一衛の知るところであっただろう．[16]

4. 冰心の詩集『春水』の手稿本について

4.1.『春水』出版前後における冰心と周作人

『春水』（1923 年 5 月）は『繁星』（1923 年 1 月）に続く冰心の第 2 詩集である．『春水』刊行前後の冰心と周作人の関係を簡単に見ておこう．

冰心は 1919 年 8 月 25 日の『晨報』に「二十一日聴審的感想」を発表したのを皮切りに，『晨報』，『燕大季刊』，『小説月報』等に続々と短篇小説（いわゆる「問題小説」）や散文を発表する．一方，のちに繁星体，春水体と呼ばれて一世を風靡する 3～10 行程度の小詩は，まず 1922 年 1 月に「繁星」が『晨報副鐫』に連載され，さらに同年 3 月 21 日から 6 月 30 日にかけて「春水」が同じく『晨報副鐫』に連載された．

単行本としては，『繁星』が文学研究会叢書の 1 冊として 1923 年 1 月に商務印書館より出版され，4 ヶ月後の 同年 5 月に同じ商務印書館から短篇小説・散文集『超人』が出る．次いで 1923 年 5 月，第 2 詩集『春水』が新潮社文芸叢書として刊行されたのである．文芸叢書の主編は北京大学教授の周作人が務めていた．『春水』は同叢書の第 1 冊として刊行されており，周作人がその出版に尽力したものと思われる．ちなみに新潮社文芸叢書之三が魯迅『吶喊』（1923 年 8 月），同之七が周作人訳『陀螺』（1925 年 6 月）であることから見ても，五四時期の新文学の中でいかに『春水』の出版が早かったかがわかる．

当時，周作人は『晨報副鐫』に「自己的園地」という評論を連載しており，1922 年 6 月 21, 22 日に発表した「論小詩」は，冰心をはじめ当時流行していた小詩に対する本格的な文学評論として注目に値する．

> 冰心女士的《繁星》，自己说明是泰谷尔影响的，其中如六六及七四这两首云，（中略）可以算是代表的著作，其后辗转模仿的很多，现在都无须列举了．[17]
> 〔冰心女士の『繁星』は，自らタゴールの影響を受けたと説明している．中でも第 66 篇と第 74 篇の 2 首は，（中略）代表作といってよいだろう．その後，次々と模倣する者が後を絶たず，いま列挙するまでもなかろう．〕

なお，『春水』の刊行と時を同じくした 1923 年 5 月 20 日，冰心は卒業論文「元代的戯曲」を提出して，燕京大学を卒業している．卒論の指導教員は燕京大学を兼務していた北京大学教授・周作人であった．

このように詩集『春水』出版の前後，周作人は冰心ときわめて近い関係にあったのである．

4.2. 濱文庫所蔵の『春水』手稿本について

濱文庫所蔵の『春水』手稿本は，サイズが 17.4×13.0cm で、きれいな線装本に製本・装丁されている．帙は濱文庫受け入れの前後に，他の本の帙といっしょに作ったもののように見える．筆跡から冰心の自筆と見て間違いなく，さらに周作人の日記と題記により，これが冰心の手稿本であることが証明される．この本の存在は，濱文庫の受け入れにあたった合山究名誉教授などきわめて限られた関係者以外には，これまで知られていなかった．

図 3　冰心(1920 年代)

図 4　周作人

『春水』手稿本の概要は以下のとおり．最初に，本文とは異なる紙質の白っぽい紙に，周作人が以下のように題字している（図 5，原文は句読点なし）．

> 此冰心女士詩集《春水》原稿，今秋整理
> 書齋，於故紙堆中覓得，轉眼已十八年
> 矣，特為裝訂寄贈
> 濱一衛君　　知堂記
> 中華民國廿八年十月七日在北平
> 〔この冰心女士の詩集『春水』の原稿は，今秋書斎を整理していて，故紙の山の中から見つけたものである．またたく間に 18 年が過ぎてしまった．特に装丁して濱一衛君に贈る．知堂記す．中華民国 28 年 10 月 7 日北平にて〕

これにより，周作人から濱一衛に贈られた経緯が明らかである．「轉眼已十八年」〔またたく間に 18 年が過ぎてしまった〕（正確には 17 年）とあるように，1922 年 11 月 21 日に冰心がこの原稿を清書してから 17 年間も，周作人宅の書籍の中に埋もれていたのである．1923 年 5 月 20 日に燕京大学を卒業した冰心は，同年 8 月 17 日上海を出港して，アメリカのウェルズリー大学に留学する．そのため，もしこの原稿が冰心に返却されて，周作人の元に保管されていなかったとしたら，散逸していた可能性が大きいだろう．

周作人の題記に続いて，詩集『春水』の表紙（図 6）に「冰心女士著／春水／新潮社文藝叢書」と記され，「豈明経手」の印が押されている．豈明は周作人の字（あざな）．表紙に続いて「自序」1 頁があり，その末尾に「十一，二一，一九二二．冰心．」と記されることから，1922

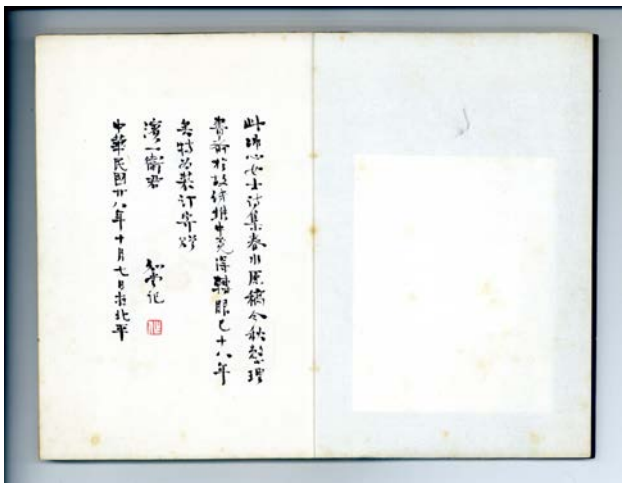

図 5　『春水』手稿本，周作人題記（浜文庫／集 15／1）

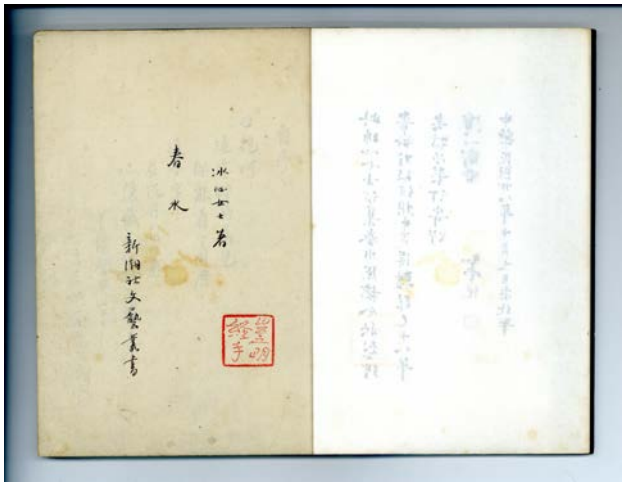

図 6　『春水』手稿本，表紙（浜文庫／集 15／1）

年 11 月 21 日にこの手稿が書かれたものと推定される．続いて 182 の詩篇が 115 頁にわたって毛筆の細字で記されている．冰心の自筆による清楚として秀麗な書体は，詩の内容と情調にふさわしい．改行と行頭の字下げに意匠を凝らした形式は，言語の白話化，非定型の自由体とあわせて，伝統的な漢詩からの決別を告げるものである．『春水』は口語自由詩として，胡適『嘗試集』（1920），郭沫若『女神』（1921）などに次ぐ初期の成果であった．

『春水』手稿本以外で濱文庫に所蔵される冰心の作品には，『寄小讀者』(36 版)（上海：北新書局，1941）がある．随所に鉛筆で注音字母が記されており、濱一衛の丁寧に読んだあとがうかがえる．

濱一衛が『春水』手稿本について記した文章は見つかっていない．唯一，「中国文学略説（詩）昭和廿七年度」（浜文庫／日文戯曲／21）と題した講義ノートに挟まれたガリ版刷りの講義用プリントに，『春水』から 4 篇の詩が記されている．その 4 首を原文と拙訳（日本語初訳）で掲載し，『春水』詩篇の紹介としたい．

三三

墻角的花！
你孤芳自賞時，
　天地便小了。
〔塀の隅っこの花よ！
おまえが誰にも気づかれずひっそりと咲いたとき，
　天地は小さくなる.〕

六四

嬰兒，
在他顫動的啼聲中
　有無限神秘的言語，
從最初的靈魂裏帶來
　要告訴世界
〔嬰児は，
そのふるえる泣き声の中に
　無限の神秘的なことばをもっている，
最初のたましいの中からもたらされ
　世界に告げようとしているのだ〕

八八

春徘徊着來到
　這莊嚴的墻上——
在無邊的清冷裏；
只能把一絲春意，
　交付與階隙裏
　　微小的草兒了。
〔春がためらいがちにやって来た
　この荘厳な壁の上に——
はてしない冷たさとわびしさの中に.
やっとの思いでひとすじの春の気配を，
　きざはしの隙間の
　　微小な草にゆだねる.〕

一八二

別了！
　春水，
感謝你一春潺潺的細流，
　帶去我許多意緒。

向你揮手了，
　緩緩地流到人間去罷
我要坐在泉源邊，
　靜聽回響。

三，五——六，十四，一九二二。

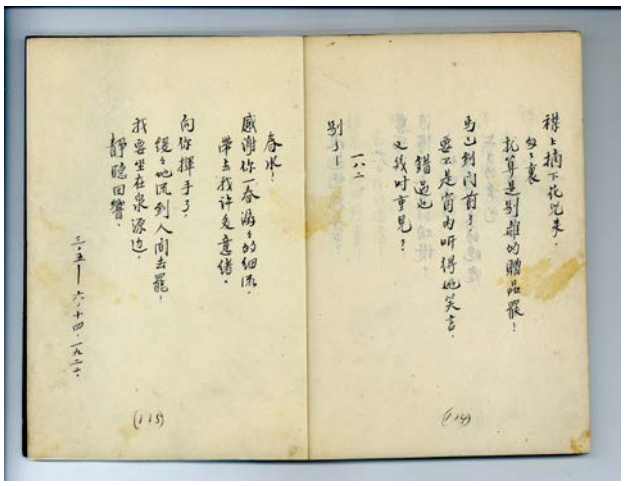

図 7　『春水』手稿本，114～115 ページ（浜文庫／集 15／1）

〔さらば！
　春水よ，
おまえのひと春の滔々たる細流が，
　私の幾多の情緒を連れ去ったことに感謝する．

おまえに手を振る，
　ゆっくりと人の世に流れて行け
私は源泉のほとりに座って，
　静かにその反響を聴こう．
1922 年 3 月 5 日――6 月 14 日．〕

創作活動の絶頂期にあった冰心 22 歳のときに書かれた『春水』手稿本は，1920 年代中国新文学初期の極めて貴重な文学史的意義を有する原資料である．『春水』手稿本発見の経緯，手稿の文学史的意義，周作人から濱一衛に贈られた前後の詳しい経緯等について，別稿を中国の学術誌『中国現代文学研究叢刊』2017 年第 6 期に寄稿した．あわせてご参照いただきたい．

5. おわりに

濱一衛と周家の関係は，もともと周作人の長子・豊一が 1931 年に旧制浪速高等学校に入学した前後に濱と交友したことに始まっていた．濱の北平留学中，1934 年 12 月から周作人邸に寄宿したのも，豊一の強い勧めがあったからだと推測される．しかし濱の留学中，『周作人日記』に記される濱一衛の記事は，わずかに以下の 3 条のみであり，周作人にとって濱一衛はあくまでも息子の友人という関係にすぎなかったと思われる．

1934 年 9 月 5 日
上午濱一衛君同舟岡並河二君来訪.
〔午前，濱一衛君が舟岡，並河両君と共に来訪す.〕
1934 年 12 月 1 日
下午濱君来寄宿豊一之西屋.
〔午後，濱君が来て豊一の西屋に寄宿す.〕
1935 年 2 月 23 日
豊一招小川，桂，目加田，濱及沈令翔諸君飯．客多大酔，小川留宿.
〔豊一が小川，桂，目加田，濱，および沈令翔の諸君を食事に招く．客の多くが酔っ払い，小川は泊まる.〕[18]

それに対して，濱の帰国から 3 年後の「1939 年周作人日記」の記述に見られる濱一衛は、周作人の若き友人として，厚遇されていることが読み取れるのである．

2015 年 3 月 25 日，新聞各紙に周作人宛の書簡が大量に発見されたとの報道があり，続いて詳報も行われた[19]．顧偉良「日本の各界人士による周作人あての書簡人名リスト（360 名）」[20]によると，濱一衛からの書簡も含まれ，さらに新たな事実が発掘される可能性もある．遺族の了解と研究者の尽力により，周作人宛の幾多の書簡が公表されれば，長年にわたって日中文化交流の中心にあった周作人と彼をめぐる人物の研究が飛躍的に進展することが期待される．

参考文献

[1] 劉承幹，求恕齋日記，国家図書館出版社，北京，2016.
[2] 陳誼整理，嘉業堂蔵書日記抄（上・下），鳳凰出版社，南京，2016.
[3] 鄭逸梅，“芸林散葉”，鄭逸梅選集第 3 巻，黒龍江人民出版社，哈爾濱，1991.
[4] 神戸輝夫，“日中戦争における文化侵略(1)”，大分大学教育福祉科学部研究紀要，vol. 22，no. 2，2000.
[5] 応長興・李性忠主編，嘉業堂志，国家図書館出版社，北京，2008.
[6] 柴田清継，“松崎鶴雄(1867-1949)と中国：あるテレビ番組をめぐって，”日本と中国の基本的人間文化：その普遍と個別，武庫川女子大学関西文化研究センター，西宮，2008，pp. 51-78.
[7] “1939 年周作人日記”，中国現代文学研究叢刊，2016 年第 11 期.
[8] 周作人日記，大象出版社，鄭州，1996.
[9] 張菊香，張鉄栄編著，周作人年譜，天津人民出版社，天津，2000.
[10] 王仲三箋注，周作人詩全編箋注，学林出版社，上海，1995.
[11] 止庵校訂，周作人自編文集：老虎橋雑詩，河北教育出版社，石家荘，2002.
[12] 劉岸偉，周作人伝：ある知日派文人の精神史，ミネルヴァ書房，東京，2011.
[13] 周作人・兪平伯著，孫玉蓉編注，周作人兪平伯往来通信集（修訂版），上海訳文出版社，上海，2014.
[14] 周豊一，“憶往”，飈風，1985，vol. 18，pp. 47-59.
[15] 周豊一，“憶往二三事”，飈風，1987，vol. 19，pp. 31-40.
[16] 小川利康，“周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇(2)”，文化論集，vol. 31，早稲田商学同攻會，2007，pp. 105-148.
[17] 小川利康，止庵編，周作人致松枝茂夫手札，広西師範大学出版社，桂林，2013.

[18] 仲密（周作人），“自己的園地”13“論小詩”，晨報副鐫，1922年6月21日.

[19] 顧偉良，“（東アジアの窓）周作人、隠れた人間像に光”，朝日新聞，2015年4月2日.

[20] 顧偉良，“日本の各界人士による周作人あての書簡人名リスト（360名），” http://www.hirogaku-u.ac.jp/pdf/list1.pdf（2017年5月5日確認）

[21] 卓如編，冰心全集，海峡文芸出版社，福州，1994.

[22] 中里見敬，“濱一衛所見 1930 年代中国戯劇：一個開拓表演史研究的日本学者”, 文化遺産, 2014 年第 4 期, 2014. のち, 中国戯劇史新論, 上海人民出版社, 2016 に再録.

[23] 中里見敬，“濱一衛 1930 年代留學中國考論：以其觀劇活動及原始資料考察爲中心”，桌子的跳舞：「清末民初赴日中國留學生與中國現代文學」日中學術研討會論文集(下)，花木蘭文化出版社，新北，2016. pp. 327-337.

[24] 中里見敬，“濱文庫所蔵戯単編年目録”，中国文学論集，vol. 37，2008.

[25] 中里見敬，“濱文庫に所蔵される南潯戯単の由来について――附：濱一衛著「劉氏の嘉業堂」”，九州大学附属図書館研究開発室年報，2012/2013.

[26] 中里見敬，“濱一衛の見た一九三〇年代中国芸能：開封・呉興”，九州中国学会報，vol. 54，2016.

[27] 中里見敬，“濱一衛の北平留学：周豊一の回想録による新事実”，九州大学附属図書館研究開発室年報，2014/2015.

[28] 中里見敬，“濱一衛の北平留学：外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態”, 言語文化論究, vol. 35, 2015.

[29] 中里見敬，“冰心手稿藏身日本九州大学：《春水》手稿、周作人、濱一衛及其他”，中国現代文学研究叢刊，2017年第6期.

[30] 謝冰心著，倉石武四郎訳，“春水”（16篇），お冬さん：謝冰心自選集，河出書房，東京，1951，pp. 178-184.

[31] 冰心著，飯塚朗訳，“『春水』より”（5篇），中国現代文学選集 第19巻 詩・民謡集，平凡社，東京，1962，pp. 51-52. のち，中国の革命と文学 第12巻 詩・民謡集，平凡社，東京，1972，pp. 51-52 に再録.

[32] 濱文庫（中国戯劇関係資料）目録，九州大学附属図書館教養部分館，福岡，1987；第2刷，1988.

---

1 主なものに，中里見敬「濱一衛所見 1930 年代中国戯劇：一個開拓表演史研究的日本学者」（参考文献 22），中里見敬「濱一衛 1930 年代留學中國考論：以其觀劇活動及原始資料考察爲中心」（参考文献 23）がある.

2 中里見敬「濱文庫に所蔵される南潯戯単の由来について――附：濱一衛著「劉氏の嘉業堂」」（参考文献 25）．中里見敬「濱一衛の見た一九三〇年代中国芸能：開封・呉興」（参考文献 26）.

3 中里見敬「濱一衛の北平留学：周豊一の回想録による新事実」（参考文献 27）．中里見敬「濱一衛の北平留学：外務省文化事業部第三種補給生としての留学の実態」（参考文献 28）.

4 中里見敬「濱文庫所蔵戯単編年目録」（参考文献 24），p. 166 参照.

5 『嘉業堂蔵書日記抄』の凡例に，次のようにいう．「本书系专门摘录《求恕斋日记》中刘氏购书、读书、藏书楼建设及管理、刻书、抄书、编书、售书等活动之史料，因皆属于藏书相关活动，故以“藏书日记”括之.」〔本書は『求恕齋日記』からもっぱら劉氏の書籍購入，読書，蔵書楼の建設と管理，刻書，抄書，編書，書籍売却等の活動について摘録したものである．すべて蔵書に関わる活動であるので，「蔵書日記」とした.〕

6 『鄭逸梅選集』第3巻（参考文献 3）p. 82.

7 日本軍による嘉業堂の略奪に関する論文に，以下のものがある．神戸輝夫「日中戦争における文化侵略(1)」（参考文献 4）．多くの中国側文献が日本軍による嘉業堂略奪を記す一方で，劉承幹と交流のあった元満鉄大連図書館司書・松崎鶴雄の進言により，日本軍は嘉業堂の蔵書を保護したという説もある．応長興「第一章　綜述」（参考文献 5）pp. 77-84，および柴田清継「松崎鶴雄(1867-1949)と中国」（参考文献 6）参照.

8 張菊香，張鉄栄編著『周作人年譜』（参考文献 9）p. 562 参照．この「苦茶庵打油詩」其三は，いま王仲三箋注『周作人詩全編箋注』（参考文献 10）p. 6，および止庵校訂『周作人自編文集 老虎橋雑詩』（参考文献 11）p. 88 に収める．訓読は，注 9 の劉岸偉による.

9 劉岸偉『周作人伝：ある知日派文人の精神史』（参考文献 12）p. 4.

10 王仲三箋注『周作人詩全編箋注』p. 9；止庵校訂『周作人自編文集　老虎橋雑詩』p. 89.

11 2009 年 6 月に恩師の村上哲見・東北大学名誉教授にうかがった話によると，旧制松山高等学校の生徒であった村上先生が中国語の手ほどきを求めて濱先生宅に通っていた際，床の間に周作人の書が掛けられていたとのことである．1939 年に贈られた「擲鉢詩」の可能性が高い．その後，村上先生は濱先生の勧めに従い京都大学に進学し，宋詞の研究で日本学士院賞恩賜賞を受賞した．濱文庫には，村上先生が濱先生に贈った論文抜き刷りが所蔵されている.

12 周作人・兪平伯著，孫玉蓉編注『周作人兪平伯往来通信集（修訂版）』（参考文献 13）pp. 249-250.

13 周豊一「憶往二三事」（参考文献 15），p. 33.

14 「民国 28 年」とするのは、周作人が題字した年を採録したものであり，「民国 11 年」または「1922 年」とするのが正しい．また，漢籍の集部に分類されているが，新学に分類するのが正しかろう.

15 小川利康「周作人・松枝茂夫往来書簡 戦前篇(2)」（参考文献 16）pp. 124-125(52-53). 小川利康，止庵編『周作人致松枝茂夫手札』（参考文献 17）pp. 76-78.

16 劉岸偉『周作人伝』pp. 262-263.

17 仲密（周作人）「自己的園地」十三「論小詩」，『晨報副鐫』1922 年 6 月 21 日．（参考文献 18）

18 『周作人日記』下冊（参考文献 8）pp. 672, 717. 周豊一「憶往」（参考文献 14）p. 47.

19 顧偉良「（東アジアの窓）周作人、隠れた人間像に光」（参考文献 19）.

20 http://www.hirogaku-u.ac.jp/pdf/list1.pdf（2017 年 5 月 5 日確認）（参考文献 20）

図版の掲載にあたり，九州大学附属図書館よりご厚意を賜った．記して感謝したい.

本研究は科研費（16H03405）の助成を受けた.

本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて、本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 4.0 国際（CC BY-NC-ND 4.0）ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja